

The Skin of Our Teeth に みられる Wilder の人間観

Time present and time past
Are both perhaps present in time future,
And time future contained in time past.
T. S. Eliot: *Four Quartets*

中 田 裕 二

1

Broadway で大ヒットし、東京でも1965年の秋上演されたミュージカル *Hello, Dolly!*¹⁾ の原作者、Thornton Wilder は現代アメリカ作家の中でもユニークな地位を占めていることは広く認められている。私はさきに *Our Town* につき、彼の手法の特殊性、彼の思想、またこの劇に対して向けられた批判などについて述べたことがある²⁾。今回は *Our Town* に続いて第2回目の Pulitzer 賞³⁾ を受けた *The Skin of Our Teeth* (1942) を取り上げ、この劇にあらわれた Wilder の人間観を考察してみたい。

The Skin of Our Teeth は日本ではほとんど上演されず、また簡単に入

-
- 1) 笑劇 *The Merchant of Yonkers* (1938) の改作 *The Matchmaker* (1954) を Michael Stewart が脚色、Jerry Herman が作詞・作曲して1964年1月16日 Broadway で上演を開始した。またこの musical は最近(1969)映画化された。
 - 2) Yuji Nakata, “*Our Town* as Commentary on Eternity,” 「英語と英米文学」(山口大学文理学部) 第1号(1965) pp.65—79.
 - 3) 小説 *The Bridge of San Luis Rey* (1927) に与えられ Pulitzer 賞(1928)を入れると3度目になる。

手できる翻訳もないので⁴⁾, *Our Town* はどは一般に知られていないし, この作品についての研究もあまり見られないようである⁵⁾。従って, まず, Act ごとの outline を述べ, 次に主要人物の各々を中心に問題点をあげてゆくことにする。

この劇は題名からも想像できるように⁶⁾, 全人類の存在が「危機一髪」の状態にまで来るという allegory である。三幕から成立しているが, 各 act ごと, すなわち三回大きな危機が人類を代表する Mr Antrobus (ギリシヤ語の anthropos—人類—をもじって命名したと思われる) と彼の一家に訪れ, あわや人類絶滅一步手前というところまで来るが, なんとかその危機を回避するという設定である。

2

第一幕の時は現代アメリカ, 所は New Jersey 州の Excelsior (架空の地名) におかれてはいるが, もっと正確に言えば, 時は geologic time (地質学的時間), すなわち人類の歴史の始まる以前である。ここで人類の生存を脅かし, 危機一髪のところまでもってゆくものは自然の猛威である。この人類共通の危機に際して Antrobus 一家がどのように振舞うかが興味深く描写さ

-
- 4) 10数年前「ミスター人類」という題で上演されたことがある。そのときの台本が唯一の訳記といえよう。
- 5) 上原袈沙美「Thornton Wilder の特色」広島女学院大学論集通巻第8集(1958) pp.35—43. 名取栄史「Wilder の二つの戯曲—その主題と技法」関西大学英文学論集第5号(1969年3月) pp.13—33. の二篇があるが, いずれも *Our Town* をより詳細に論じたものである。
- 6) Sabina によると, この劇は 'all about the troubles the human race has gone through' (p.101) である。なお by the skin of one's teeth の意味は *The Random House Dictionary* によれば (Informal) by an extremely narrow margin; just barely; scarcely である。また, この成句は My bone cleaveth to my skin and to my flesh, and I am escaped with the skin of my teeth. (Job 19:20) に由来する。

れている。大体の設定は、真夏というのに氷河の来襲に脅かされた **Antrobus** 一家が押しかけた避難民（その中には老学者モーゼ、老詩人ホーマー、三人の老婆のミューズがいる）と共にこの危機をいかにして切り抜けるかというところである。

第二幕の時も現代アメリカ（1942年）におかれているが、ノアの洪水をふまえているところからみると **biblical time**（聖書の時代）ともいえよう。場所は **Atlantic City** の会議場とその周辺の海水浴場である。ここで人類を破滅一步手前まで追いやるものは道德の乱れである。**Antrobus** 一家の主人 **George** は哺乳類会議の会長であるが、美人コンテストの女王に選ばれた **Sabina** に悩殺され、長年連れ添ってきた妻と離婚寸前のところまでくる。そのとき、「ノアの洪水」をもたらす **hurricane** が接近するが、一家の者全部および一つがいの動物各一種が無事に避難するのである。

第三幕も現代、いや近い未来ともいえよう。場所は第一幕同様 **Excelsior** である。七年間続いた世界大戦がすべてを破壊し、人々に地下生活を強いてきたが、今や平和が回復したときの状態である。しかし、まだ物資は不足しているし、戦争の傷からは回復していない。この幕で印象的な **scene** は **George** とその子 **Henry** との葛藤である。ここでは人類が自ら引き起こした戦争により、自らを破滅一步手前の危機にまで追いやる状態を描いている⁷⁾。

3

第一幕では氷河の進出で人類が絶滅の淵に近づく。**Wilder** は初期に一幕物を書いていた頃から新しい手法を駆使して観客を驚かせてきたが、この作品も例外ではない。いや、この作品こそ、彼の劇の中でもっとも奇想天外な、

7) Rex Burbank は、第一幕は *Man against Nature*, 第二幕は *Man against the moral order*, 第三幕は *Man against himself* と図式化している。Rex Burbank : *Thornton Wilder* (New York : Twayne Publishers, 1961), p.104.

人を喰ったような technique を用いているといっても差支えないであろう。Stage Manager が登場して劇の進行を助けるのは *Our Town* や *Pullman Car Hiawatha* などですでにみられるが、他に彼が今まで全然使ったことのない数々の手法が有効に用いられているのである。

その一つが、はやくも開幕前に使用される。Tennessee Williams の *The Glass Menagerie* (1944) でよく知られているスライドの利用がそれである。まず劇場名と NEWS EVENT OF THE WORLD という語が映写され、同時にアナウンサー (Stage Manager とは別人) の声が聞こえてくる。アナウンサーが氷河の進出という重大ニュースを告げる前に、この劇場内の遺失物に “To Eva from Adam. Genesis II: 18” (p. 97)⁸⁾ と刻んだ結婚指輪があったことを知らせる。続いて「Vermont 州 Tippehatchee (架空の地名)」と言うと同時に、氷河がスライドで映写される。そして「この夏の前代未聞の寒さのため北から氷河が進出し、カナダの Montreal の大聖堂が Vermont 州の St Albans まで氷に押しやられたという噂もあるのだが、これは信用し難い」(pp. 97—8) 旨を告げ、次にいよいよ Antrobus 一家の紹介に入る。

主人であり、二人の子供の父親である George は Adam に当る人物で、テコや車輪の発明家としてまた、アルファベットや九九の表などの考案者として世間の注目を引いている。これに対し、Mrs Antrobus (名は Maggie) は Eve に当り、エプロンの発明者ということになっている。彼らには Henry および Gladys という男女一人ずつの子供がいる。また、男性を悩殺するタイプの女性である Lily Sabina という女中も同居しているが、彼女はこの劇を通じて大きな役割を果す人物である。この家族は Adam 一家—すなわち allegorical に全人類—を表わすと同時に、“typical American family” (p. 99) でもある。

まず Sabina が登場してこの家族を紹介するのであるが、それに先立ち、

8) テキストは Thornton Wilder : *Our Town/The Skin of Our Teeth/The Matchmaker* (Penguin Books, 1962) を使用した。

現在彼らのおかれている状況を次のように説明する。

Here it is the middle of August and the coldest day of the year. It's simply freezing; the dogs are sticking to the sidewalks; can anybody explain that? No. But I'm not surprised. The whole world's at sixes and sevens, and why the house hasn't fallen down about our ears long ago is a miracle to me. (p. 99)

彼女がこう言っている時、右側の壁の一部がグラグラと舞台の方へ揺れてくる。続いて

Every night this same anxiety as to whether the master will get home safely: whether he'll bring home anything to eat. In the midst of life we are in the midst of death, a truer word was never said. (p. 99)

と言うや背景の一部が上階 (lofts) へ飛び上る。もちろん Sabina はこれにはびっくり仰天する。このように壁が傾いたり、揺れたり、その一部が宙へ飛び上ったりして観客の胆を奪うような technique が時々使用されるが、これは人類が破滅寸前であることを象徴するためであると解釈できるであろう。

この劇の他の特色として *Our Town* などで見られた小道具のほとんどない舞台 (bare stage) の使用、Pirandello が *Six Characters in Search of an Author* (1921) で使ったように、登場人物が自分の意見を勝手に述べて劇を混乱に導く手法、その上第三幕では、役者が食中毒にかかって演技ができなくなり、劇中劇の形で代役による rehearsal などという場面さえもある。このように、Wilder の劇には、伝統的な演劇から逸脱した不条理演劇的な要素を含んでいるようにも考えられる。彼が不条理演劇の代表作とみなされている Samuel Beckett の *Waiting for Godot* (1952) を認めたのも当然といえよう。⁹⁾

9) Martin Esslin: ...Suffice it to say that the play [i. e. *Waiting for Godot*] found

4

上で略述したように、この劇を通じて各人物の行動や発言から Wilder の人間観をかなり明確に把握できるように思われるので、次に Antrobus 一家の成員一人ずつについて述べることにする。

まず主人 George であるが、彼は典型的な男性である。男性のもつ長所や弱点が、妻 Maggie や誘惑者 Sabina のそれらと対照的によく描かれている。

開幕直後、アナウンサーは、彼の顔写真（スライド）を映写し、次のように紹介する。

He comes of very old stock and has made his way up from next to nothing. It is reported that he was once a gardener, but left that situation under circumstances that have been variously reported. (p. 98)

また Sabina によると

Of course, Mr Antrobus is a very fine man, an excellent husband and father, a pillar of the church, and has all the best interests of the community at heart. Of course, every muscle goes tight every time he passes a policeman; (pp. 99—100)

である。このように彼は家庭にあってはよき父、よき夫であり、社会にあっ

the approval of accepted dramatists as diverse as Jean Anouilh, Thornton Wilder, Tennessee Williams, and William Saroyan;... *The Theatre of the Absurd* (New York: "Anchor Books," 1969), p.21.

また *Ubu Roi* (1896) を書いて現代不条理演劇の祖と認められている Alfred Jarry (1873—1907) の Wilder に及ぼした影響については Donald Haberman: *The Plays of Thornton Wilder* (Wesleyan University Press, 1967) pp.65—68 を参照のこと。

てはその利益、向上を目ざして発明に精出す男である。しかし、いわゆる「マイ・ホーム」型の男ではなくて自分の仕事である発明に全精力を打ちこんでいるのは、妻のことは “The earth’s turning to ice, and all he can do is to make up new numbers” (p. 108) からもうかがえる。そのような男にありがちなことであるが、彼の気質にはむらがあり、物ごとがうまくゆかないときは意気銷沈し絶望する。しかし、すぐに元気を出し、希望を捨てずにやりかけた仕事へと戻ってゆくのである。このような男の家には当然多くの人々が集まる。氷河の接近で住む場所を奪われた人々、いや、マンモスや恐竜までもが彼の家に避難してくるのである。

次に「男性」としての **George** について一言する。第二幕で彼は哺乳類会議（人類部会）の60万年目の会議々長に就任し、同時に催された美人コンテストの審査員として **Sabina** を女王に選ぶ。彼は結婚5000年目¹⁰⁾の記念日を翌年の春に祝うことになっており、この間、妻 **Maggie** 一人だけを守ってきたが、ここで **Sabina** に誘惑されて **Maggie** と離婚しようとする。**Sabina** によると「男性」の代表者である彼が妻に求めているのは “a combination... of a saint and a college professor, and a dancehall hostess” (p. 164), すなわち才色兼備・貞操堅固な女性であるが、**Maggie** は第二・第三の点で欠けているのかもしれない。

それはともかく、**George** のもっとも偉大な点は、どんな危機に立っても挫折せずに、再び新しい世界を築こうとする不屈の精神の持ち主としてであるが、第三幕の大戦後の破壊のあとでの **Sabina** のことは

The first thing he wants to see are his books. He says if you’ve

10) **Maggie** による (p.131), **George** が彼女と結婚したのは19才のときである (p. 150) ので、彼は今5019才になろうとしているのであるが、女占師は彼の年令を45才と言っている (p. 142)。Wilder はこの劇で時間の二重構造 (telescoping of time——彼自身は序文で seeing “two times at once” と言っている (p.13)) をテーマにしているので、これは意識的な device であって slip of pen と見るべきではない。なお息子 **Henry** は4000才である (p.123)。

burnt those books, or if the rats have eaten them, he says it isn't worthwhile starting over again. (pp. 163—4)

からも察せられるように、古代から伝わった人間の知恵や文化を書き記した書物を守り、その声に導かれて生き続けようとする根本的には（また、これは Wilder の分身でもある）humanist としての態度であるといえよう。

George についてまだ他にも書かねばならないことが残っているが、それは他の登場人物との関連で述べることにする。

5

妻 Maggie は典型的な母親として描かれている。George が alphabet, テコ, 車輪, 九々表などを発明したのに対し、彼女はエプロンの発明者であり、針仕事が得意である。彼女はまた、母の会々長もつとめている。Sabina の少々大げさな言い方を借りると

Mrs Antrobus is as fine a woman as you could hope to see. She lives only for her children; and if it would be any benefit to her children she'd see the rest of us stretched out dead at her feet without turning a hair,—that's the truth. If you want to know anything more about Mrs Antrobus, just go and look at a tigress, and look hard. (p. 100)

彼女は自分の腹を痛めて生んだ子供のためならなんでもやろうとする世間によく見られる母親である。氷河が接近して燃やすものがなくなったとき、George は電報を打って、彼女に Shakespeare 以外の書物は全部燃やせと指示するのであるが、彼女はそれに対して 'I'd burn ten Shakespeares to prevent a child of mine from having cold in the head' (p. 107) と言う。さきにも述べたように George にとっては書物は生命から二番目に大切なものであるが、Maggie の態度には母親によく見られる、すべては子供の

ためという盲目の愛からくる anti-intellectualism を端的に表わしているとも解釈できそうである。

また、避難者の受け入れの際彼女が George とかわす次の対話の中では男女両性の気持や態度の相違がよく表われている。

Mrs Antrobus: Now, don't you ask them in! George Antrobus, not another soul comes in here over my dead body.

Antrobus: Maggie, there's a doctor there. Never hurts to have a good doctor in the house...

Mrs Antrobus: Well, just one person then, the Doctor. The others can go right along the road.

Antrobus: Maggie, there's an old man, particular friend of mine...

It was he that really started off the A. B. C.'s

Mrs Antrobus: I don't care if he perishes. We can do without reading or writing. We can't do without food.

Antrobus: Then let the ice come!! Drink your coffee!! I don't want any coffee if I can't drink it with some good people. (p. 118)

Maggie は Sabina から面と向って “I'm sorry to say it, but you're not a beautiful woman, Mrs. Antrobus.” と言われても、泰然として

Reading and writing and counting on your fingers is all very well in their way,—but I keep the home going. (p. 105)

と答えるところからみても、彼女は Wilder の一幕劇 *The Happy Journey to Trenton and Camden* (1931) の中に登場する Ma Kirby のように、家庭を守る主婦として、また母親としての自覚を持った強い女性であることは明らかである。

第二幕で George が Sabina に誘惑されて Maggie と離婚しようとするが、この危機に際しても彼女は我を失うことなく、婦人たちの手で苦勞の末かちとった結婚制度¹¹⁾を守ってゆこうと決意するのである。このとき彼女が

夫に向かって言うことばに “promise” という語が何度もでてくるが、¹²⁾これには George も返すことばがない。

[calmly, almost dreamily] I didn't marry you because you were perfect. I didn't even marry you because I loved you. I married you because you gave me a promise. [She takes off her ring and looks at it.] That promise made up for your faults. And the promise I gave you made up for mine. Two imperfect people got married and it was the promise that made the marriage... [She puts her ring back on her finger.] And when our children were growing up, it wasn't a house that protected them; and it wasn't our love, that protected them—it was that promise. (p. 150)

Maggie の主婦として、また母親としての強さは第三幕の戦後の荒廃の中

-
- 11) Cf. Mr Antrobus: ... Each wedding anniversary reminds me of the times when there were no weddings. We had to crusade for marriage. Perhaps there are some women within the sound of my voice who remember that crusade and those struggles; we fought for it, didn't we? We chained ourselves to lampposts and we made disturbances in the Senate,—anyway, at last we women got the ring. A few men helped us, but I must say that most men blocked our way at every step; they said we were unfeminine. (p.131)
また Wilder は *Our Town* の第二幕で Emily と結婚しようとする George と花嫁の父 Mr Webb との間に次のような対話をさせている。
George: I wish a fellow could get married without all that marching up and down.
Mr Webb: Every man that's ever lived has felt that way about it, George; but it hasn't been any use. It's womenfolk who've built up weddings, my boy. For a while now the women have it all their own. A man looks pretty small at a wedding, George. All those good women standing shoulder to shoulder making sure that the knot's tied in a mighty public way. (p.58)
- 12) また第二幕は Noah の洪水を想起させる台風によって人類が絶滅の危機に立つという状況をふまえているので、この “Promise” は神が人類を存続させるという “Promise” でもある、Burbank はこの Atlantic City Convention を “sort of combined Sodom and Gomorrah and Vanity Fair” (*Op. cit.* p.107) と言っているが、まさにその通りである。

でも絶望することなく生き続けようとする態度にもみられるが、彼女についての章を終るにあたり **Christian humanist**¹³⁾として **Wilder** は彼女を牧師の娘にしている点にも注目したいと思うのである。

I could live for seventy years in a cellar and make soup out of grass and bark, without ever doubting that this world has a work to do and will do it.... Well, just to have known this house is to have seen the idea of what we can do someday if we keep our wits about us. Too many people have suffered and died for my children for us to start reneging now... Goodness gracious, wouldn't you know that my father was a parson? It was just like I heard his own voice speaking and he's been dead five thousand years. (pp. 167—8)

6

この劇でもっとも観客の興味を引く人物は **Lily Sabina** であるが、彼女は「主婦・母親」としての **Maggie** に対して「女」を代表する人物といえよう。第一幕と第三幕の終では **Antrobus** 家の女中にまで成り下っているのであるが、もとは **George** が **Sabine** の丘から腕づくで連れてきて妻にした女である。**Lily** とは通称であって、本名は **Lilith** であるが、これはユダヤ教で **Adam** の最初の妻の名でもある。ここでも **Wilder** は意識的に **symbolical** な名前を選んだように思われる¹⁴⁾。

13) Cf. Edward K. Brown, "A Christian Humanist: Thornton Wilder," *University of Toronto Quarterly*, IV (1935), pp. 356—370.

14) Cf. Lilith: a character in Semitic mythology. She haunts the night as a female demon and is especially hostile to mothers giving birth and to small children. The tradition that she was the first wife of Adam is of Jewish origin, Talmudic literature of the early medieval period presenting her in this role. In its one Scriptural appearance (*Isaiah* 34: 14) the name is translated as "screech owl" (*Authorized Version*) or "night hag" (*Revised Standard Version*). *Encyclopedia Americana*, (1961) Vol. 17, p. 513

彼女は誘惑者として、すなわち男にとっては危険な存在であるが、同時に彼女自身も言うように男をして労働意欲を起こさせる女性でもある。

But it was I who encouraged Mr Antrobus to make the alphabet. I'm sorry to say it, Mrs Antrobus, but you're not a beautiful woman, and you can never know what a man could do if he tried. It's girls like I who inspire the multiplication table. (p. 104)

第二幕で Miss Lily-Sabina Fairweather として登場し美人コンテストの女王に選ばれたとき、George によると彼女は

Miss Fairweather is a college graduate, Phi Beta Kappa... She speaks seven languages and has more culture in her little finger than you've acquired in a lifetime. (p. 140)

ほど知的な女性であるが、彼女自身のことば

I've won the Beauty Contest in Atlantic City,—well, I'll win the Beauty Contest of the whole world. I'll take President Antrobus away from that wife of his. Then I'll take every man away from his wife. I'll turn the whole earth upside down. (p. 133)

からもうかがえるように “wicked woman” でもある。

彼女は知的であるが、その反面わがままであり、気まぐれでもある。たとえば第一幕で氷河の接近に絶望して死んだ方がましだと弱音を吐くが、Maggie から新しい帽子、アイスクリーム、芝居の切符などをもらえばすぐに元気を取り戻すのである。彼女のこの *carpe diem*（現在を楽しめ）の思想は、虚栄心の強い知的な美人にありがちな勇気や信念の欠除から来るものともみられるが、Sabina の場合は Phi Beta Kappa に敬意を表して（？）善意に解釈すれば、彼女の世界観から来たものとも言える。

What's life anyway? Except for two things, pleasure and power, what is life? Boredom! Foolishness. You know it is. Except for

those two things, life's nau-se-at-ing. (p. 146)

このように、彼女は現実主義者として世界を見ているので George に次のように忠告するのである。

You are a very nice man, Mr Antrobus, but you'd have got on better in the world if you'd realized that dog-eat-dog was the rule in the beginning and always will be. And most of all now. [In tears now] Oh, the world's an awful place, and you know it is. I used to think something could be done about it; but I know better now. I hate it. I hate it. (p. 175)

彼女は時々映画に行くのであるが、これは彼女自身 “Only every now and then I've got to go to the movies. I mean my nerves can't stand it.” (p. 175) と言うように、あまりにも現実が厳しいので映画という illusion に逃避するためである。アメリカ演劇には O' Neill, *The Iceman Cometh* (1946); Arthur Miller, *Death of a Salesman* (1949); Albee, *Who's Afraid of Virginia Woolf?* (1962) のように illusion の中に生きるのでなければ生き続けるのが困難な人々を扱った名作があるが、人生の不条理や苛酷な現実から時折り、いや、できれば常に逃避したくなるのも無理からぬことであろう。しかし、Wilder は Sabina を喜劇的人物¹⁵⁾にすることによってこの態度を積極的には認めていない。このことは彼の George や Maggie の扱い方からみても明白であろう。

7

最後に Antrobus 家の二人の子供 Henry と Gladys について述べるこ

15) Malcolm Goldstein は Sabina を “the sensual quality in mankind” を代表するものとし, “By making her a comic figure, Wilder demonstrates his boundless tolerance of this element in human nature.” と言っている。 *The Art of Thornton Wilder* (University of Nebraska Press, 1965) pp.120—121.

とにする。4000才になる息子の Henry は “a real, clean-cut American boy” (p. 100) であるが、もとの名の Cain が示すように兄 Abel を石で打ち殺した罰として額に緋文字 “C” が刻印されている。母の Maggie はそれを消そうとして毎日せっせと磨くのであるが、その印は全然消えないので彼女は彼に髪の毛を長くのばしてそれを隠すようにと言いつけるのである。その理由は父親の George がそれを見ると、いても立ってもおれなくなり、気が狂っていっそ死んだ方がましだと思うからにほかならない。

第一幕の終頃で Henry が再び石を投げて隣の家の少年を殺したらしいということを知って、George は絶望的になり、氷河の接近による厳しい寒さにもかかわらず火を踏み消そうとする。

Antrobus: Put out the fire! Put out all the fires. [Violently] No wonder the sun grows cold. [He starts stamping on the fireplace.]

Mrs Antrobus: Doctor! Judge! Help me!—George, have you lost your mind?

Antrobus: There is no mind. We'll not try to live. [To the guests] Give it up. Give up trying. [Mrs Antrobus seizes him.] (p. 123)

しかし、George はこの直後、自分の額に手を当てて “Myself. All of us, we're covered with blood.” (p. 124) と絶叫することからも理解できるように Henry は人間の内在的に持つ悪、あるいは原罪を象徴する人物とすることができるのである。

第三幕では Henry は金モールをつけた軍人として登場するが、ここでは人間的価値を守ってゆこうとする George と真向から対立する文明の破壊者として描かれている。

Henry: The first thing to do is to burn up those old books; it's the ideas he gets out of those old books that... that makes the whole world so you can't live in it. [He reels forward and starts kicking the books about, but suddenly falls down in a sitting position.] (p. 165)

また、Henry の “I don't want anybody to love me”(p. 165), “I want everybody to hate me” (p. 166), “I don't belong to anybody” (p. 166) などの発言からも察せられることであるが人間社会—ここでは Antrobus 一家—とのつながりを失うこと、すなわち「愛」のない社会に生きることは

It's like I had some big emptiness inside me—the emptiness of being hated and blocked at every turn. And the emptiness fills up with the one thought that you have to strike and fight and kill. Listen, it's as though you have to kill somebody else so as not to end up killing yourself. (pp. 171—2)

ということになるのである。

これを如実に示すために Henry と George の乱闘の場面で Henry に扮する役者が力一杯 George の首を締め、Sabina があわててそれを止めて芝居を中断させるという手のこんな技法を Wilder は見せるのである。

一方、娘の Gladys は George にとって “little angel, little star” (p. 111) であって、彼が絶望しているとき、彼女はすばらしい成績表を見せたり Longfellow の “The Star”(p. 124)¹⁶⁾ という詩を暗誦したりして彼を元気づけるのである。このように人類の希望と完全の可能性を象徴する彼女であるので、(墮落の印とみられる) お白粉を塗ったりすると、たとえそれが面白半分でしたことであっても、母親 Maggie を絶望させ、彼女から叱責されたり打たれさえもする。

16) “The Star” という詩は Longfellow にはない。これは “The Evening Star,” “The Light of Star” または Martin Opitz の原作を訳した “The Stars” のいずれかであろう。また、Mrs Antrobus は p.130 で Well, I could go on talking for ever—as Shakespeare says : a woman's work is seldom done;... と言っているが、これは Shakespeare のことばではなく、古いことわざ “Man may work from sun to sun/But woman's work is never done.” (John Bartlett : *Familiar Quotations* (Boston : Little, Brown Co., 1955¹³), p.1001) の後半にもとづくものと思われる。

しかし、第二幕で George が Sabina に誘惑されるところでは Gladys が赤い靴下をはいて “Papa liked the colour.” (p. 147) と言うが、赤はたしかに、この場合人類の墮落や誘惑を象徴する色であるので、George には自分の罪を気づかせ、娘も悪に染まらないように気をつけさせる文字通り「赤信号」の役割りを果たことになる。

第三幕で戦争のため人類が絶滅の淵に立たされるが、戦後に Gladys が赤ん坊を抱いて登場する。これは希望の象徴である Gladys に子供が生まれたということで人類の存続を示していることは言うまでもないことである¹⁷⁾。

8

この fantasy と satire と morality とを合わせたような劇の、全人類を代表すると言える 5 人の主要人物の言動を通じて、われわれは Wilder の人間観や世界観が以上のように明確に把握できるのである。彼は代表作 *Our Town* において人間は時間・空間を超越して、いずれの時・場所¹⁸⁾においても根本的には同じ生活（生まれ、愛し、死ぬ）を営んできたことを示したのであった。*Our Town* と *The Skin of Our Teeth* との関係は Wilder 自身序文で

17) Cf. Sabina:… Each new child that’s born to the Antrobus seems to them to be sufficient reason for the whole universe’s being set in motion. (p.100) また *Our Town* では第二幕の結婚式の前に Stage Manager は “The real hero of this scene isn’t on the stage at all, and you know who that is. It’s like what one of those European fellas said : *every child born into the world is nature’s attempt to make a perfect human being.*” (p.68 Italics added) と言っている。

18) Wilder が舞台で描出しようとする事件は舞台上の設定のいかんを問わず always “now,” (p.11) と always “here” を目指していることは彼の有名なことば I began writing one-act plays that tried to capture not verisimilitude but reality. (p.11) によくあらわれている。

Again, the events of our homely daily life—this time the family life—are depicted against the vast dimensions of time and place.
(p. 13)

と言い、また *Time* の記者に

“*Our Town*”, says Wilder, “is the life of the family seen from a telescope five miles away. *The Skin of Our Teeth* is the destiny of the whole human group seen from a telescope 1,000 miles away.”¹⁹⁾

と語ったことから明らかなように、時間・空間の扱いにはたしかに大きな相違はあるが、どちらも、ある家族に人類全体を代表させ、前者では一見平凡と思われるが、その実、意義深い日常生活を、後者では人類全体の運命を、*allegorical* に描出しているところからみても、密接なつながりを持つ二部作と言うことができるのである。

さて、この *The Skin of Our Teeth* では人間はどのような危機に立っても絶望せずに生き抜く²⁰⁾ ことにより、危機を乗り越えてゆけるという Wilder の全作品に通じる明るい人生肯定²¹⁾ の哲学が全篇を通じて流れているのであるが、これが手ばなしの楽観主義ではないことは次の George のことばから

19) “An Obliging Man,” *TIME*, LXI, Jan. 12, 1953, p.47.

20) Wilder はこの点において Camus と相通じるところがある。たとえば「ペスト」の結末に “There are more things to admire in men than to despise.” (*The Plague* (Penguin Books, 1960) p.251) とあるが、これは Wilder の作品全体を通じて見られる根本精神でもある。また *The Skin of Our Teeth* の第二幕で Fortune Teller が “Keep your doubts and despairs to yourselves.” (p.135) と言っているが、Camus も劇 *Caligula* の第四幕で “No, he [i.e. Caligula] has taught you despair. And to have instilled despair into a young heart is fouler than the foulest of the crimes he has committed up to now. I assure you, *that alone would justify me in killing him out of hand...*” (*Caligula/Cross Purpose* (Penguin Plays, 1965), p.81. と Cherea に言わせている。Cf. Allan Lewis, *American Plays and Playwrights of the Contemporary Theatre* (New York : Crown Publishers, 1965), p.73.

21) Cf. Barnard Hewitt, “Thornton Wilder Says ‘Yes,’” *Tulane Drama Review*, IV (Winter, 1959) pp.110—120.

も充分うかがえる。

Oh, I've never forgotten for long at a time that living is struggle. I know that every good and excellent thing in the world stands moment by moment on the razor-edge of danger and must be fought for—whether it's a field, or a home, or a country. All I ask is the chance to build new worlds and God has always given us that. (p. 176)

いや, Sabina による結びのことばの前半

Oh, oh, oh. Six o'clock and the master not home yet. Pray God nothing serious has happened to him crossing the Hudson River. But I wouldn't be surprised. The whole world's at sixes and sevens, and why the house hasn't fallen down about our ears long ago is a miracle to me. [She comes down to the footlights.] This is where you came in. We have to go on for ages and ages yet.

You go home.

The end of this play isn't written yet.

Mr and Mrs Antrobus! Their heads are full of plans and they're as confident as the first day they began,—and they told me to tell you: good night. (p. 178)

が第一幕の冒頭で彼女が世界の混乱状態を伝えたときのそれとほとんど同じであること²²⁾から見ても、人類の未来は決して明るいものではなく、数々の困難や危機が待ちかまえていること、しかし、重要なことは George が言うように “The most important thing of all: The desire to begin again, to start building.” (p. 173) であることを Wilder は訴えているのである。

22) この劇はこのように循環の形で終わっているが、plot の一部においてもまたこの点においても Wilder 自身 “The play is deeply indebted to James Joyce's *Finnegans Wake*.” と序文 (p.14) で認めているように *Finnegans Wake*—riverrun で始まり the (ピリオドなし)で終る循環の誓一に負うところが多い。